"この事態"をどう思う

"アイク"の訪日延期をきいて、ホッと胸をなでおろした国民は少なくないだろう。これまで一番心配したことは"時期が悪い"ということ。せっかくのお客さまにもし失礼でもあっては…と気をもんでいたが、それが十五日夜の国会乱入事件でいっそう気がかりになった。その矢さきの訪日延期だから、率直にいってヤレヤレという気持ちが先に立っただろうが、国内の混乱はこれだけではおさまりそうもない。これからどうなるのか、またどうしたらいいのか。訪日延期を機会にその声を録音してみよう。

党派こえ考えよう

民主主義は危機に立った

社会党参議院議員 加藤シヅエ氏

「アイゼンハワー大統領を国賓として迎えるという国の決定が、六・一五の全学連の暴行によってくつがえされたことは、日本の民主主義が危機に立っていることを示している。というよりはむしろ日本の民主主義が滅びてしまったとさえ極言できる。もうこの時期になって警察がやりすぎたとか、岸首相の責任であるとか、議論するのはとんでもない見当違いである。いかにして日本の民主主義を暴力から守り、国会の信義を回復してマヒした政治を救うかがせっぱつまった問題だ。社会党であれ、自民党であれ、党利党略を離れて日本の将来のためを考えなければならない。

わたくしはすでに十年以上も社会党員として国会に籍をおいているが、日本の民主主義がこのような"破壊"にさらされたことを深く恥じる。実際この数週間、浅沼委員長がマッカーサー大使にアイク訪日延期を申し入れたり、外交官の資格で来日したハガチー氏をデモと喪章で迎えたり、国会にデモで圧力をかけようという党の決定に対して、間違っていると思っても黙って服してきた。また正しいと思ったことも発言しなかった。他人の思惑や、党内の批判や、同じ党員の夫の将来を恐れたためだ。わたくしはひきょうだったと国民の前にわびたい。

しかし、いまやわたくしは全学連を先頭とする破壊的イデオロギーから日本を守り、民主主義を発展させるために敢然と戦うことを誓う。現在の日本は共産主義と民主主義の戦場と化している。安保条約改定の当否とか、岸首相のやり方などは焦点ではなくて、反米暴動を誘発して日米の離間を策している。もしこの策動に乗れば、いまわたくしたちの享受している自由がなくなってしまうことは明らかだ。社会党が正しいか、自民党が正しいかという二者択一の問題ではなく"何が正しいか"ということをみんなで考えなければならない。

個人個人が反省して社会正義を樹立することがまず大事だ。社会党の審議放棄も野党の戦術の一つかもしれないが、国家のためを思った方策ではない。訪日延期をきっかけに行きがかりを捨てて与野党が話し合うことが第一だ」